

# 英語語法文法学会 第29回大会資料

日時： 2021年10月16日（土）

オンライン開催

<http://segu.sakura.ne.jp>

今年度はオンライン開催となります。

・「総会」と「ワークショップ・研究発表・シンポジウム」とでは開催方式が異なります。

・「総会」は10月16日（土）10:00～10月22日（金）18:00の間、プログラムと資料を本学会ウェブサイトにて公開します。質疑応答は公開期間内にメール交換で行います（[segu.office@gmail.com](mailto:segu.office@gmail.com)）。

・「ワークショップ・研究発表・シンポジウム」はZoomを利用して行います（質疑応答を含む）。

・アクセスのためのパスワードは同封の書類で通知しています。

英語語法文法学会

*The Society of English Grammar and Usage*

September 2021

# 英語語法文法学会 第 29 回大会プログラム

---

**日 時：2021 年 10 月 16 日（土）**

今年度はオンライン開催となります。

・「総会」と「ワークショップ・研究発表・シンポジウム」とでは開催方式が異なります。

・「総会」は 10 月 16 日（土）10:00～10 月 22 日（金）18:00 の間、プログラムと資料を本学会ウェブサイトにて公開します。質疑応答は公開期間内にメール交換で行います（[segu.office@gmail.com](mailto:segu.office@gmail.com)）。

・「ワークショップ・研究発表・シンポジウム」は Zoom を利用して行います（質疑応答を含む）。

・アクセスのためのパスワードは同封の書類で通知しています。

**大会実行委員：濱松純司（委員長）、大室剛志（副委員長）、大竹芳夫、住吉誠、出水孝典、林龍次郎、吉田幸治**

## 総会（本学会ウェブサイト）

開会の辞／学会賞・奨励賞選考報告…………… 会長 中澤和夫（青山学院大学）  
事務局報告…………… 事務局長 山本修（大阪市立大学）  
会計報告…………… 会計 吉川裕介（京都外国語大学）

## ワークショップ（Zoom）10.30 – 10.55

司 会 吉川裕介（京都外国語大学）  
井口智彰（大島商船高等専門学校）

1. 「get a look の get は軽動詞か？」

## 研究発表（Zoom）

午前の部 11.00 – 11.35

司 会 吉川裕介（京都外国語大学）

1. 「比較構文における形容詞の相対性と絶対性に関する一考察」  
島本慎一郎（日本大学）
2. <発表者の都合により中止>

午後の部 13.30 – 15.15

司 会 住吉 誠（関西学院大学）

1. 「英語における V-ing 補文の主語の構文文法的分析」  
酒井啓史（筑波大学大学院）
2. 「知覚動詞の現在分詞補文に見られる話者の心理的作用について」  
村岡宗一郎（日本大学大学院）
3. 「連結動詞 remain の意味と否定辞 un- を伴う主格補語構文」  
岩宮 努（大阪大学大学院）

## シンポジウム 15.35 – 17.45

テーマ「正しい英文解釈に必要な語法文法知識」

司 会 吉田幸治（近畿大学）

1. 「伝統的英文解釈指導の功と罪—必要なことと不必要なこと—」  
吉田幸治（近畿大学）
2. 「否定と肯定の強さ—not very, barely/hardly/ scarcely, by all means をめぐって—」  
林龍次郎（聖心女子大学）
3. 「文法構文とその変種の意味について」  
岡田伸夫（関西外国語大学）

閉会の辞 山本修（大阪市立大学）

## ワークショップ (Zoom) 10.30 – 10.55

司会 吉川裕介 (京都外国語大学)

### get a look の get は軽動詞か？ – take a look との比較による事例の分析 –

井口智彰 (大島商船高等専門学校)

主動詞が get の構文(get a V)に関しては、辞書や語法書では get a look (at)の事例が散発的に言及されているが、類似する構文との意味的な違いが必ずしも明示的に提示されていない。例えば、「ジーニアス 5」では、‘take [get, have, cast, shoot, steal, give, throw] a look at…’ 「…をちらりと見る」と記述されている。本研究は、get a V 構文(get a look) を take a V(take a look)と比較することにより、その意味的な特徴の解明を試みる。get a V 構文は take (have) a V に比べ、構文に共起できる V が限られており、構文の成立に強い制約がかかる。その理由として、get には意味の漂白化が起りにくいということが考えられる。get は所有や状態の変化を引き起こす起動動詞(Curme 1931, Kimball 1973)であるが、その意味的な特徴は動作・行為の着点というよりも、終点 (行為の結果) の焦点化(Lindstromberg 1991)にある。The guy knocked you down. Took your purse. Did you get a look at him? (COCA)の事例で、話者は聞き手に対し、「財布を盗った男が見えた」のかどうか「行為の結果」を確認している。「見えた」という結果状態が焦点化されているのは get の語彙的な意味が保持されているためである。主動詞に take (have)を使用すると、意味が変わるだけでなく、場合によっては容認度が下がることがインフォーマント調査により判明した。類似した事例についても get a look と対応する take (have) a look のミニマムペアを提示し、その意味の違いや容認度について考察する。

## 研究発表 (Zoom) 午前の部 11.00 – 11.35

司会 吉川裕介 (京都外国語大学)

### 比較構文における形容詞の絶対性と相対性に関する一考察

島本 慎一郎 (日本大学)

叙述形容詞が比較級で用いられる場合、その意味内容に応じて、「相対比較」と「絶対比較」の2種類が表わされる。

(1) a. Tom is *older than* Mary. [相対比較]

b. Monday was *hotter than* Tuesday. [絶対比較]

「相対比較」が表される文では、old が Tom や Mary の特徴を必ずしも描写するとは限らず、形容詞が客観的な「尺度」を表すものと捉えられる。一方、「絶対比較」が表される文では、形容詞が発話者の主観的な「評価」を表し、Monday も Tuesday も hot であったことが「前提」とされる。しかしながら、形容詞の表す意味内容がどのような規則やメカニズムで「相対比較」と「絶対比較」に結びつくのかについては、これまで複数の文法家によって議論されてきたが、現在のところ、一貫した言説を得るには至っていない。

本発表では、形容詞を、先行研究で指摘されている「尺度」と「評価」のほかに、tiny や hot のような「尺度+評価」を表す形容詞を加えた3つに大別して考察する。大別したそれぞれの形容詞グループが①「相対比較」、②「絶対比較」、または③文脈に依存して、①と②のどちらも表すという3パターン異なる振る舞いをする言語事実を例文を提示しながら考察を進める。

<午前の部の第2研究発表は、発表者の都合により中止となりました>

### 英語における *V-ing* 補文の主語の構文文法的分析

酒井啓史 (筑波大学大学院)

英語における動名詞・現在分詞補文 (以下、*V-ing* 補文) の主語は顕在化する場合としない場合がある。さらに、*V-ing* 補文の顕在化されない主語は主節主語と義務的に一致する場合とそうでない場合がある。

(1) a. Evelyn<sub>i</sub> dreads  $\Delta_i$  singing a solo.

b. I<sub>i</sub> argued against  $\Delta_{i/j}$  seeing a lawyer.

Thompson (1973) はこの違いを動詞の意味タイプに還元している。主動詞に私的動詞が選択された場合、義務的に主節主語と *V-ing* 補文の主語は一致する(= (1a))。一方で、公的動詞が選択された場合はそのような一致関係は義務的ではない(= (1b))。しかし、私的動詞が選択されているにもかかわらず、主語の一致が任意である場合がある(= (2))。

(2) I<sub>i</sub> don't like  $\Delta_{i/j}$  sending first offenders to prison. (Wood (1956: 12))

本発表では、このような例外的な振る舞いを示す事実を説明するため、4つの構文タイプを提案する。具体的には、(2)のような例外的な振る舞いは、*V-ing* 補文が公的事態を表す場合、*like* などの私的動詞は構文の意味により公的動詞の解釈に強制されると説明する。さらに、*V-ing* 補文の主語の顕在化に関しても個別の語彙項目を立てることなく包括的に説明することができる。

### 知覚動詞の現在分詞補文に見られる話者の心理的作用について

村岡 宗一郎 (日本大学大学院)

現代英語の知覚動詞は原形不定詞と現在分詞を補文にとる。このうち、原形不定詞は知覚事象の完結性を表す一方、現在分詞は知覚事象の非完結性や一時性を表すという。この現在分詞補文について、Akmajian (1977) を除く先行研究では、従来進行形と同様の相を表すとされている。また Leech (2004<sup>3</sup>: 19) によれば、単純現在形と進行形の選択は話者の心理的要因にも影響されると述べ、吉良 (2006: 38) は具体的な例を示していないが、この心理的要因は知覚動詞補文における原形不定詞と現在分詞の選択にもパラレルに反映されるという。本研究では、知覚動詞の現在分詞補文と進行形にはどれほど類似性が見られるのか、特に Leech (2004<sup>3</sup>) や吉良 (2006) の述べる心理的要因はどれほど知覚動詞の現在分詞補文にも反映されているのかについて、“無生物主語と位置動詞の現在分詞”を補文に取る知覚動詞を中心に議論していく。

### 連結動詞 *remain* の意味と 否定辞 *un-*を伴う主格補語構文

岩宮努 (大阪大学大学院)

(1) a. He had **remained** {*unseen*/ \**seen*} throughout the meeting. (Huddleston & Pullum.2002: 1440)

b. ...the property **has remained** {*undeveloped*/ \**developed*}.(Wordbanks)

Huddleston & Pullum (2002)は、(1a)の *seen* が動詞の受身形に過ぎず、形容詞と捉えられないために、*remain* の主格補語になれないと指摘するが、この一般化では *more* や *too* などの語で段階修飾が可能で ( *ibid.*:531~533)、*feel* や *seem*

などの他の連結動詞の補語にもなれる *developed* のような典型的な分詞形容詞が、この連結動詞の主格補語になれない事象を説明できない（ちなみに *feel seen* などの表現も問題なく容認される）。連結動詞 *remain* は機能的な側面として主語を叙述する分詞形容詞を補語に受けるが、完結の意味を表す語はその補語にとれない。本稿は、完結の意味が否定接辞によって打ち消されることにより、[NP<sub>1</sub> remains *un-V-ed*] ↔ [the purpose of X<sub>1</sub> has not been completed by being *V-ed*] という生産性の高い独自の構文が顕現し、これをプロトタイプとし、発話完了型、受動者消滅型といったサブスキーマ構文（前者では *say/call*、後者では *eat* などが基体動詞となる *un-V-ed* 型の分詞形容詞が用いられる）が派生する事象を検討する。

## シンポジウム (Zoom) 15.35 – 17.45

### テーマ 「正しい英文解釈に必要な語法文法知識」

司会 吉田幸治 (近畿大学)

本学会の「設立趣意書」にも述べられているように「英語の具体的な語彙や構文の特性を一つ一つ明らかにする」ことは、英語という言語を理解するための基礎的作業として極めて重要である。最新の言語理論や英語教育学などを理解することよりも、語彙と構文の研究を通じて得られる正しい知見があることによってはじめて英文に対する正確かつ深い理解が得られることになり、これが英語を教えるための第一歩ともなることを忘れてはならない。

本シンポジウムは正しい英文解釈に必要な知識および視点を紐解いていくことを目標にするものである。具体的には、日本における英文解釈指導の歴史を回顧し、解釈に必要な事項の整理を行い、日本人が苦手とする否定を含む表現の実態を探り、多くの日本人が誤解しやすいと思われる慣用表現と構文の問題について基本と周辺の問題から考察することになる。英語研究を深めるための方向性のみならず、教育にも有益な情報を提供したいと思う。

### 伝統的英文解釈指導の功と罪 —必要なことと不必要なこと—

吉田幸治 (近畿大学)

日本では、明治期以降一貫して大学入試および大学院入試、入社試験等で課される英語の試験において、高度な英文解釈能力を必要とする問題が出題され続けている。こうした状況が一世以上にわたってほとんど不変であるために、教育現場では試験に合格することを目的とする教育が行われており、今でも英文解釈を中心とする教育が中心を占めている。

こうした状況は近年の過剰な「実用主義」を唱える人たちによって批判の対象とされることも少なくないが、不十分な時間でしか行われていない日本の英語指導の現場では依然として有効な指導法の一つである。本発表ではこれまで英文解釈において何が教えられてきたのかを振り返り、今後も引き続き指導されるべきものと不要なものの項目選別について考察することにする。また、英語の理解に重要と考えられる語彙・文法知識についても整理する。

## 否定と肯定の強さ

—not very, barely/hardly/scarcely, by all means をめぐって—

林 龍次郎（聖心女子大学）

日本の「英文解釈」は、伝統的な学校文法の知識および英和辞典の記述を主に利用することで学習・教育が行われてきた。しかし、伝統的に教えられてきた内容と現代英語の事実との間に差異（もともとの誤り・最近の変化）があることや、辞書に書いていない（あるいはまだ書かれていない）事実があることには注意を払う必要がある。本発表ではこれらのことを、否定・肯定を強めたり弱めたりする表現を通して考えていく。次に示す3点について事実を探求していきたい。

（1）“not very + 形容詞” の連鎖は、「あまり…でない」という弱い否定の意味だとされることが多いが、「全く…でない」の強い否定しか挙げていない英英辞典や語法書もある。

（2）準否定語の *hardly*, *scarcely* と比べて *barely* はより肯定的とされるが、英英辞典では明確な区別がされていないこともある。

（3）*by all means* という成句は「ぜひとも」という強い肯定的な訳語が与えられることが多いが、実際には条件付きの肯定と思われる場合がある。

これらを通して、新時代の英文解釈および語法研究に向けヒントを提供することが本発表の目標である。

## 文法構文とその変種の意味について

岡田伸夫（関西外国語大学）

英文解釈は知的な営みである。英文を解釈するには、まず語句と構文の意味を知っていなければならない。さらに、語句と構文の意味と世界知識・一般常識を統合してテキストを構成する力が必要である。本発表では、文法構文の意味に関する以下の問題に的を絞り、具体例を使って英文を解釈するには文法構文が持つ複数の意味を知ることが肝要であると論じる。

1. *I sent him a book.* と *I bought him a bike.* はそれぞれ *I sent a book to him.* と *I bought a bike for him.* と同義であると教わるが、両者は本当に同義か。そもそも日本人学習者は二重目的語構文が理解できているのか。

2. *Harry says that his girl friend, who is a bit strange, wants to raise chickens in Tibet.* の非制限的関係節の内容に責任を持つのは発話者か。それとも *Harry* か。

3. 複文 *I believe that the world is flat.* の意味上の主要部は主節の *I believe ...* か、それとも従属節の *the world is flat* か。

4. *X if not Y* 構文の伸展型の意味が周知されていないのはなぜか。どうして伸展型の意味が出てきたのか。譲歩型には2つのタイプがあるのではないか。

5. “... not ... because ~” 構文で *not* が *because ~* を否定するとき、~は事実か。この構文の二義性の説明法でほかの構文の二義性も説明できないか？

## 英語語法文法学会役員

会長	中澤和夫			
名誉顧問	八木克正	安井 泉	内田聖二	
事務局長	山本 修			
会計	吉川裕介			
運営委員	五十嵐海理	大竹芳夫	大室剛志	金澤俊吾
	吉良文孝	住吉 誠	出水孝典	中澤和夫
	西脇幸太	濱松純司	林龍次郎	前川貴史
	山本 修	吉川裕介	吉田幸治	
編集委員	吉良文孝（編集委員長）			
	牛江一裕	大竹芳夫	大橋 浩	大室剛志
	金澤俊吾	澤田茂保	滝沢直宏	中澤和夫
	中山 仁	西田光一	林龍次郎	松村瑞子
	家口美智子	山岡 洋	吉田幸治	

発行日 2021年9月16日

---

編集・発行 英語語法文法学会

代表者 中澤和夫

事務局 〒558-8585 大阪府大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学英語教育開発センター 山本修 研究室内

Tel.: 06-6605-3587（研究室）

Fax: 06-6605-3587（共同研究室）

Email: [segu.office@gmail.com](mailto:segu.office@gmail.com)

URL: <http://segu.sakura.ne.jp>

振替口座 02260-0-70393 英語語法文法学会

© 英語語法文法学会

---